新契縁録

Sample

寺田先生へ

渡部（わたなべ）　真理（まり）

拝啓　二〇一八年三月。ことさら寒かった冬が過ぎ、桜が早く咲き始めております。寺田先生！　お元気でいらっしゃることと存じます。ちおん舎での「米寿のお祝い」以来、お目にかかっておりませんが、みなさんのFBなどで先生のお元気な日々を伝え伺っております。目標にさせていただきたい存在です。

二〇一〇年「ちおん舎読書会」に初めて参加しました。平日は仕事に没頭し、週末は心理カウンセラーになるための学校に通い、考える間を作らないようにして人との交流を避けていた時期でした。仕事では毎日外国人としか会わない生活で、日本人との余計な話をしなくて済むため、精神的にはとても落ち着いていました。そんなときに友人Jさんが読書会に誘ってくれました。

前の年、夫（五十三）が急性心不全で急逝し何が起こったかわからないまま時が過ぎ、人と会うことが苦痛だった時期でした。辛かったのは「早すぎる」「若くて無念だっただろう」「孫も見ないで逝くなんて」などの慰めの言葉でした。それは悲しみをさらに深めました。あるとき友人が「幸せな時間はあったのよ。それでいいじゃない。長い短いなんて関係ないのよ」という言葉で救われました。そこに「ちおん舎読書会」への参加という機会を得た次第です。

その後、私の心に大きな変化がありましたが、寺田先生との出逢いであることは間違いありません。夫が長い旅に出て九年。子どもたちが結婚し、この春六十歳という年齢になり、森信三先生にならって、私なりの「大改革」を進めております。あのお話は衝撃的でした。このような折に、先生へのお手紙が書けることはとても大きな喜びです。ありがとうございます。またお目にかかれることを楽しみに過ごしてまいります。

寺田先生、どうぞお元気でみんなのために長生きなさっていただきたいと思います。

今後ともよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。かしこ。

〒六一二―八四三二　京都市伏見区深草柴田屋敷町一〇―四

寺田一清先生　略伝

◆呉服屋の末っ子として誕生

一九二七（昭和二）年三月十五日、岸和田北町の商店街にある呉服屋に誕生した。父・喜代太郎、母・ヤスヱの間に、長男信夫・長女愛・次女豊と生まれた後の第四子であった。

寺田家は、喜代太郎が呉服商を営んでいたことから、一清が生まれる三年ほど前に呉服屋を開店。

七十八軒の店舗が連なる商店街に呉服屋は七店もあったが、一清が誕生した頃には、店は軌道に乗り繁盛していた。それゆえ、一清は、店には従業員、家には女中がいるという大きな呉服屋の、いわゆる「お坊ちゃん」。

末っ子で、そのうえ体があまり丈夫でないということもあり、皆から大切に育てられていた。

◆劣等感のかたまりだった幼少時代

体はあまり丈夫でないうえに、目立つことも好きではない。幼稚園ではいつも隅っこのほうにいた。

小学校に上がってもそれは変わらず、特に運動関係が苦手。小学校を卒業すると、中学校へ進学した。同じ組からは五名ほどしか進学しなかった。

時は第二次世界大戦の真っ只中である。本を読むことも勉強も好きだったが、どうも成績がぱっとしない。

進学を希望したが、行きたかった高等学校の受験には失敗。そこで、モラロジーに縁の深かった父親の勧めもあって東亜外事専門学校（現・麗澤大学）に入学した。

◆発病、そして終戦を迎える

東亜外事専門学校では、成績はまずまず優秀であったが、戦時中ゆえ勤労奉仕ばかりで勉強はほとんどない。

戦局は厳しさを増し、いよいよ兄も上級生も召集された。このまま戦争が長引けば自分にも召集命令は来る。

いつ令状が来ても行けるようにと準備だけはしていた。

そんなある日、なんとなく体が重いので、検査を受けてみたら「肺に陰りがある」とのこと。

結核ではと疑っていた頃、一九四五年八月十五日、終戦―。

◆病床に伏す～天理教への導き～

故郷・岸和田は何発か焼夷弾が落とされた程度で、戦災を免れた。寺田家はお店の中に防空壕を掘り、皆そこに避難しており無事だったが、終戦間近に召集された兄だけは、終戦後、体を弱らせて帰って来たため、まもなく肺結核で亡くなった。

一清も岸和田に帰って来てからは、肺結核のために病床に伏し

sample

ていた。兄が亡くなったこともあり「弟も弱そうやし、もうあかんやろな」という声まで耳に入ってくる。毎日、結核の薬を山ほど飲まされたが、治る気配がない。薬の副作用で太っていくだけ。

そんなある日、天理教を信仰していた母親の縁で、母親が所属する教会長の雪本清三郎氏がやって来た。その素朴な言葉は、一清の心に響くものがあった。「『結構』すぎて『結構』がわからんのはあんたのこっちゃ」「頭ばかりに力入れないで、やわこうなりなはれ」。

そして、本を手放すようにと言われ、一清はたくさんあった本を売り、そのお金を賽銭箱へ入れて拝んだ。

また「薬は飲んではいけない。人間の体には自分を守ろうとする力（免疫）があるから、薬に頼ってはいけない。神様が守ってくださる」ということも教わり、たくさんあった薬を全部捨ててしまった。そうすると、一清の結核は悪くなるどころか、この時以来、うす皮をはぐ如く良くなり生涯一度も薬というものを飲んだことはない。

◆呉服屋を継ぐ～仕入れと陳列はうまいが～

長男である兄が亡くなったため、自然と呉服屋は一清が継ぐことになった。

しばらくお勤めの渡悦子さんを、父親が「あの娘は商売上手や」と勧めたことから、二十五歳で結婚し、四男一女にも恵まれた。商売があまり好きでも上手でもなかった一清は、接客上手な妻に支えられながら、なんとか呉服屋を継続させた。

後に、森信三先生が呉服商を営む一清についてこんなことを言っている。「仕入れと陳列は上手いが、商売は下手」。まさにこの通りだった。

当時、七十八軒ある商店街に、呉服屋は七軒。その中でも、一清の商品を仕入れる目と厳しさは群を抜いていた。問屋で展示会があれば、必ず「一番選り」。他の呉服屋が選んだ後の商品には目もくれなかった。また、陳列も上手く、どの商品とどの商品を並べればお互いがより映えるかがわかっていた。

これこそ、後に「本の編集」に携わることになる、一清の才能の一つである。

◆森信三先生との出会い「これなら私にも実践できる」

一九六五（昭和四十）年二月、この年を一清は忘れることができない。三十八歳の一清にとって生涯の恩師となる森先生との出会いの年である。

出会いのきっかけとなったのは、小学校時代の恩師・露口忠春先生である。子供のことで悩みを抱えていたとき、ちょうど露口先生が校長に就任したということで挨拶に行ったのだ。その時、露口先生の口から「森信三先生の全集が出るんですが、読

みませんか？」

一清は「森信三」という人物をよく知らなかった。そのうえ、全集はまだできておらず、これから毎月配布されるものだという。しかし、あの尊敬する露口先生の言うことだ、間違いはあるまいと思い、全集を購入することに決めた。

その後すぐ、本屋で森信三氏の『人生二度なし』という書物を見つけ「ああ、露口先生がおっしゃっていた方の本だ」と思い、それを買ってまず読んでみた。

一読して、一清は今までにない衝撃を受けた。「これは他の先生の本とは違う」と思った。

いろんな立派な先生方、宗教家が同じようなことを言っているが、森信三氏の書かれている内容は他のものとは全く違った。とにかく日常の中でできる具体的なことを説いているのだ。

・飯菜別食、半身入浴、無枕安眠

子育てに関しては『家庭における躾けの三ヶ条』として、

・朝のあいさつをする子に

・「ハイ」とはっきり返事のできる子に

・席を立ったら必ずイスを入れ、ハキモノを脱いだら必ずそろえる子に

こんな簡単そうな当たり前のことが、基本中の基本だと書いてある。「これなら私にもできる。実践できる」と思った。

それから、多くの教えの中で最も感化影響を受けたのは「立腰」、すなわち「腰骨を立てる」ことの大切さであった。これだけは教わったその日から守り続け、身についた。

◆森信三先生の言葉を編集・発行

一清が出会った当時、森先生は七十歳。九十七歳で亡くなるまでの二十七年間、一清はただひたすらに師から教えを受けた。まずは全集を精読、大阪での読書会や研修会に参加。それから、語録の記録・編集の仕事等に勤しみ、森先生の語録である『不尽片言』という小冊子を発行した。

一九七七（昭和五十二）年、五十歳のときには『一日一語』を編集・発行。二十万部のベストセラーになり、今も読み継がれている。その後『不尽叢書』『親子教育叢書』や、二十五巻まで出ていた全集に続けた『続全集』八巻などを発行。

また、社団法人「実践人の家」の常務理事を十五年もつとめ、森先生の教えを広め、実践し、社会へと貢献し続けた。

しかし、本業である呉服商よりも本の編集に力を入れるようになったため、当然、呉服商の仕事は縮小し、店舗も発行した本の在庫を置く倉庫へと変わった。

「森先生に惚れて、惚れて、惚れ抜いたことだけは誰にも負けない。どんなに厳しいことを言われても、私は生涯、森先生一人を師匠とし続けた。私の生涯は、森先生との出会いなくして

sample